



巻 頭 言

「情報処理」の編集にたずさわって

大 野 豊*

情報処理学会が設立された当初、筆者も「情報処理」の編集幹事の一人として数年間末席をけがしていたことがある。当時はまだ会員数も少なく、計算機の研究もやっと盛んに行なわれだしたところで、本会誌に発表される論文も少なく、隔月の刊行であったにもかかわらず、論文やその他の記事があつたらず、会誌の発行はおくれがちで、編集幹事会としてはかなり苦労したように思う。その記憶があるので、昨年会誌の編集をまかされたとき、その責任を果たせるかどうか、多少の心配はあったが、編集幹事諸氏の熱心なご努力のおかげで、大きなトラブルもなくどうやら今日までやってこられた。ここに紙上を借りて関係諸氏にお礼を申しあげます。

昨年は丁度学会創立 10 周年にあたり、この機会にこれまで隔月であった会誌が月刊にされた。情報処理に関する研究が広範になり高度になるとともに、学会の会員数も急速にのびてきたことを反映して、会誌に投稿される論文やその他の記事も多くなり、この 1 年間編集がとどこおることなく、むしろ論文投稿から会誌掲載までの期間が長すぎる、という文句が出るほどとなった。したがって、会誌発行ということには、以前のような苦労もなく、今年度からはさらに増頁が計画されるに至った。

しかしながら、本学会誌に問題がないわけではなく、多くの会員から種々の形で批判がよせられている。それらの批判は組織的にアンケートなどであつめたものではないので、会員の全体的な意見とは限らないが、一般的ないわば評判として、むずかしすぎる、役に立つ記事が少ない、内容がかたよっている、などといわれており、このため折角入会した会員が退会することもあるようである。このような批判は他学会の会誌でもありがちなことであり、会員の研究発表の場としての役目さえ果たせればよい、という考え方もある。しかし、研究発表する会員は全会員の中のほんの一部であり、多くの会員は自分のたずさわる情報処理の実務に役立てたい、参考にしたい、情報処理の一般的教養

を高めたい、と考えて会員になっていることと思われる。このような要望を十分に満たすことはできないとしても、これを無視しては会誌と学会の発展は望めず、狭い同人雑誌になりかねない。われわれの編集方針としても、これらに少しでもこたえようと、かなりの努力をし、解説・講座・教室といった記事をふやしてゆくことにしたが、まだ会誌の中に形として充分にはあらわれていない。

学会の創立以来の事情もあって、従来、学会誌は総体的に計算機を作る側の立場に立つ記事や論文が多かった。現在情報処理の分野は非常に広い範囲に及び、特にその応用分野は大きな発展を遂げた。このような事情を考えると、情報処理学会は単に計算機技術者だけの学会でなく、広く各分野のユーザも包含すべきであり、作る側と使う側のコミュニケーションの場としての役目も学会誌は果たすべきではないかと、筆者は考えている。現在のところ、当学会はユーザが広い範囲から参加しているとはいいいにくく、メーカーとユーザのコミュニケーションは、むしろ各メーカーごとにつくられているユーザ会が果たしているといえよう。しかし、このようなユーザ会では、共通な一般的な発展は望めないであろう。情報処理学会に多くのユーザが参加するようにするためには、学会誌の内容もそれにふさわしくならなければならないが、早急にそれを実現することはむずかしい。また、一方ではこのような方向に学会誌をもってゆくことに、必ずしも賛成しない向きもあるようである。しかし、一応学会誌に少しでもユーザが親しめるような内容を盛り込もうとしてみたが、力たらず、また短い期間のため、初期のとおりにはならなかったのは残念である。

以上、学会誌の編集にあたって、その意図したところを果たせなかったことを報告しておわびに代えるとともに、情報化社会の進展に伴って、当学会の果たす役割もますます大きく重要になってゆくことと思われるので、その主要生産物である学会誌に対する積極的な批判と協力を今後ともお願い致します。

(昭和 46 年 4 月 16 日)

* 昭和 45 年度 編集担当常務理事
鉄道技術研究所システム研究室長 工博